

之が發達を計ることには「財界不況にして労働組合の積極的なる経済闘争が不利なる折柄……誠々賢明の道あり方である」(民衆新聞、大正一五、七、一)とし、又「消費組合の職令には協同主義的方面のみならず、戦闘的の方面がある」乃ち「第一に労働組合運動の兵站部の充實と、之を通じて組合員夫人連の組織とがある。ストライキに於て、労働者の結束の山崩れるのは、いつも台所からである。サーベルの花と棍棒の唸り、白刃の閃きも覚悟を決めた能業者の前には何等の權威に値しない。不意、却つて並々能業者の意気を高ゆるの弁だ。然るに、此の官室の壓迫、反動団体の暴徒に屈せぬ猛者連も、家へ帰り、空の米櫃を握りて餓餓に迫つてゐる妻子の顔を見ると、張りつめた勇氣も消えてしまふ。此の時吾等の消費組合があつて争議中の兵糧も引取つて呉れ、又之れによつて組織された夫人連が高志を激励してくれたならば、争議は必ず勝利である。その他、消費組合を通じての協同戦線の形式、未組織大衆との接觸及其組織、下層プケブルとの政治的提携等、争議の末には其の職令は實に磨凡である。吾等は吾等の戦闘力をより、強大にするために、吾等の戦線をより擴大する為めに、吾等は消費組合を作らねばならぬ」(労働新聞、大正十五年七月二十日)と云つて居る。

如斯、消費組合を労働組合の兵站部たらしめんとする活動は、昨身甚しく明と

ホつて来た。

総同盟全國大會(大正十五年十月三日より五日)に於ては、「総同盟内消費組合設置に關する件」(尾ヶ崎聯合會提出)を提案し、「この際、社会部の所制の下に消費組合同盟組織準備委員會を設けて、該同盟の設置を促進するやうにしたい」と、満場一致可決したのである。従来、総同盟関係の消費組合、一は「野田利用購買組合」(大正十二年争議の際、創立)及び「総同盟東部連合大崎支部の大崎消費組合」二組合であつたが、本年七月、川崎川崎利用購買組合が田島消費組合と連友同志會が共働連購買組合(大正十五年七月)を、総同盟同方働組合が上崎消費組合會(大正十五年十月十日創立、出資額一十二万)が此方法に付金一月以上とす)を開始し、製鋼労働組合川崎支部、横浜工信會、廿目下設立準備中であつたと云ふ。

総同盟、関東同盟會理事會は、昨年八月二十一日、関東に於ける「総同盟関係消費組合の統一を計るため同盟會事業部を充實し、消費組合の統一の任に當ることとし、野田利用購買組合の主体たる、関東、藤造労働組合は、昨年七月十日の「第四大會」に於て「消費組合統一に關する件」を協議可決、各支部と連絡し、共同購買を行